

救済のために襲われた

庫発りべるき

本書は体験版です

〈本書における注意事項〉

1. 本書作成におきましては細心の注意を払っておりますが、利用の際、人々に与える印象については個人差が生じる可能性があります。

また、当サークルへの連絡については本書の最後に記載されている説明に沿ってお願いいたします。

2. 本書の利用や当サークルとの連絡の際、法令や公序良俗に反することはしないでください。法令に基づき処罰などをされる場合があります。これについては次のことも含むものとします。

(1) 本書の内容を当サークルの許諾無く一部または全部を複製・転載すること。ただし法令で認められた場合は除きます。

(2) 本書に関して正当な批評の範囲とされない誹謗・中傷をおこなう。言動を起こす前に、ほんの少しその是非を考えてみるだけで防止できると思われず（一例…批評文として公言する前に考慮すべき点はないのか検討する）。

(3) 本書には現実世界で行うには不適切とされる描写が含まれております。特に製品版ではそういった要素が

強くなっております。

但しこれらについてはそのような行為を実際に行うことを推奨するものではありません。本書の利用を理由に法令や公序良俗に反することは絶対にしないでください。

3. 本書の内容はフィクションです。実際の事件・人物・団体などとは関係ありません。

ある建物の食堂。二人の男性が入り、適当な席に座る。それぞれの仕事の都合上、食堂にやってきたときは多くの人々が昼食をとるであろう時間帯を相当過ぎていた。今はそんなに人はいない。

メニューを眺めているのは男性の内の一人、柿井朝和^{かきいあさかず}。三十八歳。朝和はメニューを眺める。

「ふーむ。せっかくだから今日は少しばかり豪華にしてみるか」

デザートを一品添えることにした。豪華にしたのはそれだけで、あとはそこそこの食事を注文、である。

朝和と一緒にいる男性は、田浜時則^{たはまときのり}。四十歳。

時則は注文にいたっては特に何も細工することなく、いつもどおりに食事をとった感じで注文した。

やがて注文した料理がやってきて、二人は食べ始める。

「先日の発表から大分長いこと経ったな」

朝和が言った。

「ああ、そして今日俺が出席した会議はその発表に関して今後のことをどうするかというものだった」

時則が答えるように言った。

時則はあることに関する、政府の合同プロジェクトチームに関する仕事をしている。

「そういえば少し前まで、こんなことがあちこちで言われたものだったっけな」

朝和が少し考え込むように言った。

「正規雇用になることが難しいと嘆く人たちに対して、『少し探せば求人広告がいっぱいある。仕事を選び好みするから悪い』なんてな」

朝和の表情を見た時則が何かに対して答えるように言った。

「だが実際はたとえ多数の求職者が問答無用で求人広告に飛びついたとしても、採用する企業側が希望の人材で無ければ採用しないという面だっただけだ。採用する側だつて人を選ぶものさ。だから求職者もその辺を計算に入れる必要があった」

時則の解説は続く。

「また、度を越した長時間労働など不当な状況で働かせるケースもあった。労働者の肉体的・精神的ダメージがひどくなり、退職せざるを得なくなってもおかしくないほどに」

「いわゆる『ブラック企業』か」

朝和が一言添えた。

「そうだな。で、そのテの企業は退職者が出ればその都度求人広告を出して代わりを補充。だから求人広告が頻繁に出てる割には従業員数が少ない、なんてことも」

「まあ、求人広告をめぐっては他にもいろいろあったが」

一言述べた朝和を見て、時則はこのようなことも語る。

「生活保護についてもこんなことがあったな。求人広告の実情への無理解から、生活保護を受けること自体への偏

見にもつながったり。単に働きたくないから：なんて感じで」

時則の後に続くように朝和が語る。

「確かに、明らかに不正とされても仕方が無いケースもあった。しかしそのことを過大に強調し、生活保護を受けると自体を不正であるかのような印象を与えられ、報道や有識者などの発言その他モロモロに悩まされた人達も多かった」

「不正、か：」

時則は何か考え込むような顔つきをした。そして、こう言った。

「俺と柿井さんが出会ってからどのくらいの時が経つかな」

「田浜さんが合同プロジェクトチームの調査の仕事で俺のもとを訪れたことがきっかけだった。今は合同プロジェクトの開始から何ヶ月も経っている」

時則に答える朝和。そして朝和はおもむろにこう言った。

「飛躍した言い方かもしれないが：プロジェクトが立ち上がる前、求人広告が社会への損害につながった出来事があった」

あの日、朝和はある街を歩いていた。雨が降る街を、傘を差している。

やがてひとつの建物に着いた。

朝和は建物の中にある目的地へと向かう。目的地は：：：消費生活センターだった。

朝和の姿を見た職員が一人が声をかける。

「柿井さん、こんにちは」

「こんにちは」

職員のあいさつに朝和が答える。

朝和は消費者庁に勤務している。仕事がらみであちこちの消費生活センターを訪問することがある。

この消費生活センターは何回も訪問しており、顔見知りの職員も多い。

センターの一角で仕事の話に入る。あらかじめ予定されていたことを話したり書類を読んだり、淡々と仕事を進めていく。

いつもの調子だな。そう考える朝和は気付いていなかった。

今自分がいる建物を、傘を差しつつ外から見つめる一人の若い男がいることに。

やがて男は建物に近づく。そして中に入っていく。

その男の向かった先は：：：

やがて朝和と周囲の者たちは知ることになる。自分達の周辺で異変が起きていることに。

「私はあの人のためを思ってあのようにしたんですよ！何であんなことをするんですか！？」

「ですから、あの、ここではそういう質問にはお答え

できませんので…」

若い男が窓口の女性に激しく迫るような勢いで怒鳴っている。

「何だ？」

朝和は驚いている。離れた場所にいる朝和達にまで声が聞こえている。

〈続きは製品版で〉

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一三年 一月三日

〈当サークルとの連絡について〉

1. 受付は添付ファイル無しテキストのメールのみとなります。

但し本書と関係のないことや本書始めに記載されている注意事項（以下、注意事項と表記）に沿わないものは、受付を拒否せざるをえない場合があります。ご了承ください。

2. 方法や内容が注意事項に適合しているか否かを問わず、また、当サークルがすでに検討・考案・実行などを行っていることと類似している点の有無に関わらず、当サークルでは次のように扱います。

(1) 通信内容は保存する場合があります。また、回答や何かしらの行動は保証をいたしかねます。

(2) 報酬・対価などを提供することなく公開・利用させていただく場合があります。いただいた個人情報等は法令に基づく場合を除き個人を特定できない範囲で扱います。

メールアドレス： hyoku_sr_m@yahoo.co.jp

当サークル公式サイト

<http://d-pd-plus.cocolog-nifty.com/blog/top.html>

(このアドレスは以前の当サークル名に沿ったものです)